

弱さから見えてきた新しい関わりのかたち  
認知症にであう



## 高橋源一郎さん

(インタビュアー：雲母書房／茂木敏博)

### 弱さへのきっかけ

——東京オムツ外し学会へのご出演、ご快諾いただきありがとうございます。さて、そもそも「弱さ」に興味をもたれ、研究しようと思ったきっかけはどういうことだったんですか？

**高橋** ぼくの両親はスカッと亡くなったんです。祖父母の介護は母親と弟がやっていたので、こっちは手伝っていません。そもそも、ぼくはそういうことにまったく興味がなかったんです。

ぼくの子ども、弟のほうか、5年くらい前に病気になったのがきっかけなんです。当時、2歳だったんですが、「急性脳炎」で緊急入院した。ちょうどお正月でした。病院からは、死ぬ確率が3分の1、重度の障害が残る確率が3分の1だって言われました。最初は、絶望的な気持ちに陥って超パニック、どうしていいかわからなくて慌てたけど、次の日には少し落ち着いてきて、どうなろうと受け入れようと思ったんです。つまり、障害が残ったり、極端な場合には植物状態になったとしても、ともに生きていこうと心に決めた。しかし奥さんは、医者から

## ■ profile

**たかはし・げんいちろう** 1951年1月広島県生まれ。小説家、文学者、文芸評論家。明治学院大学教授。日本を代表するアヴァン・ポップ文学の担い手。競馬評論家としても活躍中。近著に『さよならクリストファー・ロビン』（新潮社・谷崎賞）『銀河鉄道の彼方に』（集英社）ほか。

横浜・善了寺で秋に開催する予定のセミナーと集会の打ち合わせで辻信一さん（明治学院大学・文化人類学）にお会いしたのが4月のこと。そのあと、戸塚駅前の飲み屋に流れたのだが、その席で辻さんから、高橋源一郎さんと共同で2年ほど「弱さの研究会」というのをやっているというお話をうかがい、いたく興味を抱いた。

まだその余韻が消えない5月某日、福岡の宅老所よりあいにくふらっと顔を出したら、来週、高橋源一郎さんがNHKラジオ「すっぴん！」の取材で見えるという話をうかがった。うん？ このシンクロニシティ（ご縁）はなんだ？

折しも、12月の東京オムツ外し学会のプログラムを思案中だったので、そのふたつの偶然に背中を押されて高橋さんにメールを差し上げ、東京オムツ外し学会への出演を打診してみた。すると、翌日にはOKメールをいただいた。

ご返事のメールには、「6月19日の午後9時からNHKのBSプレミアムの『旅のチカラ』で、イギリスの『子どものホスピス』を訪問したドキュメンタリーが流れますので、ご覧くださいと幸いです」とあった。

連絡をいただいたのが6月11日だったから、オンエアは1週間後のこと。これも偶然だけど、もうひとりゲストとして考えていたのが鳥取のホスピス医・徳永進さんだったので、さっそく交渉して（ホスピスつながり！）出演のご了解をいただいた。教えてもらった番組も、とても印象深く、心に残った。

朝日新聞論壇時評だけでなく、とくに3・11以降の積極的な政治的発言、医療や介護、障害者分野への急接近……、いまは超有名作家、かつての左翼青年になが起こっているのか、お会いしてお話をうかがってみたくなった。

8月14日、お盆の真ただ中。猛暑の鎌倉の隠れ家で、1時間30分ほどお話をうかがった。ここに紹介するのは、そのほんの一部である。詳しくは、オムツ外し学会でたっぷりとお話いただくことにしよう（茂木記）。



説明を受けたその瞬間にそう思ったみたいです。母親ってすごいですね。

いまも少しだけ障害が残っているんですが、でも想定外だったのは、子どもの状態を受け入れようと思ったとき、ぼくの中にもものすごく大きな感情が生まれてきたことなんです。身体の中から力が湧いてきて、喜びがあふれてくる感じでした。

子どもの障害を受け入れようと決めたとき、ぼくは「これをやるのは君しかない」って神様から指名されたように感じました。それがこの気分の高揚の理由だったのかもしれませんが。つまり、弱い人間、病んだ人間から力を付与されたり、喜びを与えられるって、すごい発見というか、ぼくに大きな価値転換が起こったんだと思う。それが、「弱さ」に興味をもった個人的なきっかけです。

## 弱さをキーワードに据えてみたら……

——NHKのラジオ番組「すっぴん～源ちゃんの現場～」で宅老所よりあいにく取材に行かれたことが今日のインタビューにつながったんですが、お子さんの病気という個人的な体験から、



弱さ、あるいは弱さの力ということに関心が広がっていったわけですね？

**高橋** そうですね、弱さを抱えた人たちを中心にした施設とか、共同体について関心が出てきて、いろいろ調べたり、本を読んだりするようになったことは確かです。ぼく自身が目を向けることを避けてきた、ある意味でぼくたちの社会の主流からは外れた場所で、弱さの力を採用している人たちのところに行ってみようと思ったんです。それがラジオ番組の取材先になっていきました。イギリスの子どもホスピスに行ったのも、そういう流れです。

——イギリスのホスピスについては後でお聞きしますが、いろんな、弱者を中心に据えた活動を訪問されて、なにか共通しているものは感じられましたか？

**高橋** それが病気の人でも、障害をもった人でも、認知症の老人でも、その人たちを保護してやろうという姿勢がまったく感じられないことですね。そうではなく、その人たちのもっている力を発揮してもらおう。そして、本来もっている生きる力を発揮してもらおうことが、まわりによい影響を与えると考えるんです。

エンパワメントの考え方といっしょで、彼らがいるお陰で、まわりの人たちが力づけられるという、そこに力点が置かれているんですね。「保護」の考え方というのは、彼らは弱い存在なので、彼らを助けなければならないってことでしょ。そうではなく、反対に、彼らに助けられるわけです。すべての組織で、そこは共通しているんです。

——NHKBSのドキュメンタリー、拝見しました。たくさんの子どものホスピスで亡くなっていくわけですが、そのあとも交流が続くんですね。親たち自身の喪失からの回復と、その経験を次の家族に伝えていく。ホスピスのスタッフの方々も魅力的でした。

**高橋** 施設のスタッフが言っていましたが、この場所くらい、深く悲しみ、深く喜び、深く感じられるところはない。そこに来ると、ロックしていた感情が開かれて、傲慢な人は謙虚に、怒りっぽい人はおだやかになる。少しだけ、人間そのものが静かで、感じがよくなる。これは死んでいった子どもたちからのギフトだ、と。

日本では、淀川キリスト教病院にはじめて、こどもホスピスが誕生して、去年そこにも取材に行きましたが、その小児科の先生も同じことを言っておられました。そういう場所で、死にゆく子どもたちと時間と空間を共有すると、少し違った人間になれるって、頭では理解できても感覚でわかるのは難しいですね。

——ホスピスってイギリスで、教会の活動から始まったと思うんですが、やっぱり宗教色を強く感じられましたか？

**高橋** チャプレンはイギリス国教会の人なんですが、キリスト教とは直接は関係ありません。おもしろいのは、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教と、いろんな宗教の儀式セットが祭壇のうしろに用意されていたこと。儀式はなんでもやります、って言っていました。

## あえて始めた政治的な発言

——3・11以降、ぼくも言葉を喪失するというか、言葉が身体から蒸発しちゃうというような経験をしましたが、高橋さんは言葉をしぼり出すようにして、片時も休むことなくメッセージ



を発信し続けて来られました。『「あの日」からぼくが考えている「正しさ」について』（河出書房新社）を拝読しても、ここは引かないっていう、表現者としての強い意志を感じましたけど。

**高橋** NHKのラジオもそうですが、ちょうど3・11直後の2011年4月から、朝日新聞の論壇時評の仕事がスタートしたんです。もちろん、連載の話は前の年に決まっていたとはいえ、このご縁というか、偶然は驚きでした。だから月一回、この国と社会について書き続けようという心の準備はできていたので、3・11が起こったとき、そんなに大混乱はしなくて、割とすっきりと、これはきっちりと向き合おうと思ったんです。

——元政治青年が、それまでは、政治的な発言は意識的に控えてきたってことなんですか？

**高橋** 政治的発言はしないって決めていました。そのほうがカッコいいと思っていたし。でもだんだん、それは逃げじゃないかって思うようになってきたんです。それに、文学者が政治的発言をしないというのは、小説のほうが社会的言説より上ってことでしょ。それも変だなんて思っていました。で、もう20年以上前ですが、湾岸戦争のとき、それまでの禁を解いて「文学者の声明」のメンバーに加わったんですね。でも、9・11のときだって、特別、何か言ったわけではありません。

いまは特に、大学で教えているので、学生からなにかを訊かれたら、「あとでね」なんて逃げないで、精一杯、答えたいと思っています。立場上、リスクは拾わないといけない。だから、いまは躊躇はないんです。でも、実は小説もそういうものなんですよ。読者の中にある、まだ質問にもならないものに勝手に答えるのが小説なんです。

## 認知症の人に出会う

——「よりあいの森」に取材に行かれて、認知症の人たちに囲まれて、率直にどんな印象をもたれたんですか？

**高橋** 認知症には合理性があるって、はじめて気づきました。あんなに一度に認知症の人に出会うのは初めてだったけど、でもとってもおもしろかった。例を挙げます。

あるおばあさん。ひとり暮らしで、昼間は宅老所に通ってきています。「おひとりで寂しくないんですか？」って聞くと、「いえ、家は5人で住んでいますから」と言うんです。お父さん、お母さんたちと住んでいるって。亡くなった人がいっしょにいるから、1人で住んでいられる。もちろんこれは、認知症による錯誤というか、妄想です。でも、認知症がなかったら、寂しくて死んじゃうかもしれない。だから認知症って、神から与えられた恩寵なのかもしれない。すばらしいですね。

あるおじいさん。よく見ると、50年前の地図に従って徘徊しているんです。もちろん道も風景も変わっているので混乱はあるでしょうが、道に迷ったら近所の人が教えてくれます。それよりも、若い頃親しんだ、50年前の風景や人物が見えるので、全然寂しくないのです。これもすばらしいでしょ。

もう一人、あるおばあさんの話。ずっとよりあいに来ているのに、ぼくが取材に行った日に、このおばあさんはほとんど目が見えないってことがわかった。村瀬孝生さんが、なんかゆっく



り歩くなあとあって、そのとき初めて気がついた。何年もつき合っていて、目がよく見えなくて、こちらの顔が見えていなくてもこれまで不自由しなかったって、すごいことでしょう。

——リアルタイムの入力情報を必要としないわけですね。いま・ここからの情報が遮断されたら、ぼくたちは大パニックに陥ると思いますけど。

**高橋** そのとおりです。でも彼らは、すでに膨大なデータの蓄積があって、それに基づいて動いているから、新しいデータは要らないんですよ。こうやって、あらゆる感覚をゆっくりゼロになるまで落として行って、人生の店じまいをする。認知症は、人生をソフトランディングさせるとしても優れた現象なのかもしれない。困るのは周囲の人のほうなんで、この姿こそ当たり前なんだと周りが思えればいいわけでしょう。

——よりあいでは、ぼけを病気だとは思っていないし、むしろ個性のひとつくらいに考えているから、そういう視線と環境に囲まれていれば、それは少しも異常なことではないんですね。

**高橋** よりあいの森に行くと、スタッフも利用者もボランティアも地域の人、みんな楽しそう。いま、いろんな形で手伝っている人たちも、きっと、やがては自分もここでお世話になりたいと思っているはずですね。

「ぼけを地域に返す」ってよりあいの人たちは考えているんだけど、もともと昔はそうしていたんですよ。昔は、ぼけは神様扱いされていた。それなのに、近代になって突然、不用品にされちゃった。だから、もう一回、神様に戻せばいいんじゃないでしょうか。実は、そのほうが人手も、お金もかからないから合理的なんです。隔離して、すべて管理下に置いて世話しようと思うと、限りなく人手とお金がかかる。ぼけは自然現象なんだから、はみ出さないように少し注意して見てあげれば、だんだん弱って行って、食べられなくなって、朽ちるように死んで行くんです。

——医療をやらなくていいことも、大事みたいですよ。

**高橋** 病院に入ると病気になっちゃうから。年をとるのは病気じゃないんだから、病院から出ると、ほとんど元気になるって聞きました。85歳以上の人の40%が認知症だって言うでしょう。村瀬さんも話してたけど、40%もの人に現われている症状は、もう病気じゃないですよ。自然過程なんだから、治そうっていう発想がそもそもおかしい。

ともかく、人手も、お金もかからずに、みんなが幸せになれる合理的なやり方なんだから、ぼけの人を中心にゆるやかな共同体を再構築するってのがいいんじゃないでしょうか。そう考えると、希望が見えてくるよね。

## 弱さとチンチンは希望

——インタビューの最初のところで、仮にお子さんに障害が残っても、お前が引き受けると、神様から指名されたと言われました。でも、これだけ自己中心主義が行き渡ってしまうと、弱者から指名されたというようなセンスは、もう育ちようがないような気がします。そういう共同規範を、この社会は取り戻すことができるのでしょうか。

**高橋** それは、いくら口で言ってもだめでしょうね。経験するしかないことだからね。弱者の

問題っていうのは、自分が弱者の横に行かなければ始まらないんです。よりあいがすばらしいところは、そういう経験を地域の人たちがさせてもらえる場を提供しているってことなんです。

ぼくたちは、資本主義の誘惑に負けて一度、共同体を壊しちゃったんだから、そういう経験をやる場を新たに作るしかない。でも、宅老所って、いま全国に1000か所以上あるんですけどね。これも、ひとつの希望でしょうね。

——よりあいのことで思い出したんですが、以前、谷川俊太郎さんがよりあいに行って、深いぼけのお年寄りたちを前に、自分の詩の朗読をしたことがあった。一生懸命に詩を読んでいるのに、だれも聞いてくれない。でも、おならとか、ウンチとか、チンチンとか、下ネタ系の詩を読んだら、みんなが一斉に注目したんだそうです。社会的な自己の形成前、つまり子どもと、社会的な自己がほどけてしまった認知症の人って、興味を示す対象が似ているんです。子どもも、ウンチの話が大好きです。

**高橋** まわりが過剰反応するから、大人たちの反応を見て、「おっ、これはウケる！」と思うんじゃないのかな。まわりが無反応だったら、あんなにウンチって言わなくなります。

それと、ウンチもチンチンも、子どもにとってダイレクトに性的なものにつながっているので、<sup>まがまが</sup>禍々しい感じがして過剰に反応するってこともあるかもしれない。

ともかく、認知症の人も子どもも弱い存在なので、まわりに頼って生きていかななくてはならない。特に子どもは、どういう言葉を発するとまわりが喜んでくれるかっていう本能をインプットされているんだと思う。2～3歳の子の言語感覚ってものすごく鮮烈だし、彼らが繰り出す言葉って、ものすごく過激です。

ぼくは、しりあがり寿さんの『はしるチンチン』という絵本が大好きで、うちの小学校で親が交替でやっている朝の読み聞かせで、この作品を取り上げて小学校1年生に朗読しました。もう、大ウケだったけど、そのあと子どもたちは日中、「チンチン！」ばかり言っていたそうです（笑）。で、先生からは注意されましたけどね。

——どういう話なんですか？

**高橋** コウキくんという3歳の男の子が、いきなりチンチン出して走り出し、世界中を走り回る話です。砂漠を抜け、紛争地帯も通り抜け、都市のビルの中では自殺しようとしている人に遭ったりして、それでもどンドン走って行く。みんな、そういう、裸で「チンチン！」と叫びながら走っていく子どもに力づけられる。最後は、光に向かって走って行って、その向こうにいるお母さんに抱きしめられて終わり。——コウキくんのチンチンを見た人たちは、なにか変化が起こるんですか？

**高橋** 死のうと思っていた人が思いとどまったり、子どもを亡くして悲しんでいる親が元氣になったりするんです。いい話でしょ。超絶絵本です。

——チンチンが世界を救う……。意味深なお話ですね。予定時間をオーバーしてしまいましたが、いろいろなお話をうかがえて、とても充実した時間でした。ありがとうございました。



しりあがり寿 (著・イラスト)  
発行：岩崎書店 / 定価：1,300円＋税